

カトリック仙台司教区・カリタス・ジャパン 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

22号では3・11から一年経ち、SDSC各ベースの一年の歩みについて各ベース縁の方々に、原稿を依頼いたしました。ベースの産声をあげた順からご紹介いたします。まずは、塩釜ベース。始まりは3月20日でした。

し
お
が
ま

(旧)カリタス塩釜ベースの思い出



前教皇大志塩釜ベース訪問。筆者右端

全世界から750余名の皆様が東北のボランティアのために塩釜教会に御参集頂き、深く地元根ざした活動をしていただいた事に心より感謝申し上げます。次第です。

震災の1週間後に、教会をボランティア受け入れのための施設としての役割を相談され、長期の活動になるのではないかと畳の必要性を思いつき、残り少ない携帯の電源で各友人に電話したことが昨日のように思われます。さらにそのアイデア(80畳の畳)を現実化してくれた友人に深く感謝するものであります。まさに何も無いあの状況下では奇跡でありました。そしてその畳が、(旧)カリタス塩釜ベースとして大きな役割を果たしてくれた事は、全く想像だに出来ないことであります。

最近、震災から一年経過したということでその前後を比較されますが、被災された方々にとっては何の意味もなく、あの日から辛い毎日がずっと続いているのが現状です。

どうか更なるボランティアの皆様を招聘する為のキャンペーンとしていただきたいものと存じます。

現在、過去に婦人会で行った「味噌づくり」からヒントを得て、「味噌づくりをとおしてのふれ合い会」を行っております。あの日に失った大事なものを思い出しながら、共に寄り添うことが、現在の私達の日課となりました。

(カトリック塩釜教会 三島千明)

「桂島」ボランティア

塩釜の浦戸諸島、桂島の前浜清掃ボランティアに参加したのは、東日本大震災後3ヶ月を過ぎた7月でした。船を降り浜に向かう途中、目にする景色は多くの被災家屋が壊れたまま手付かずの状態にあり、海岸の松は津波被害により茶褐色に変色していました。浜辺に打ち上げられる瓦礫は波に乗って次々と押し寄せ、片付けは根気のいる作業でした。最近同じ場所を訪ねる機会がありました。被災家屋は片付いていましたが、跡地には泥だらけになった布団や生活用品が山のように積み重なっていて、一年の時間が過ぎても、そこで生活を営んでいた人々の深い悲しみと痛みが残っているように感じました。



塩釜市の震災犠牲者慰霊祭

12月より仮設住宅集会室で月一回「お茶っこ」の会を開催しています。初めは緊張ぎみで参加されていた方々も会を重ねる

うちにうち解けられるようになり、今では新しく参加する方も増えています。ボランティア10名で活動する私たちは、活動後は分かち合いをして振り返りと次回の企画について話し合いを行っています。その土地で暮らし続ける方々の生活をそこねることなく、笑顔で寄り添うことができるように活動を続けたいと思っています。(カトリック東仙台教会 京 早苗)

次はあなたがリーダーです！！

先日、一年の想いと共に塩釜にもどりました。被災地域はだいたい平らになり、応急の地盤沈下対策が施されていました。緊急時の応援や支援が一段落したことで、一時的な人口増加が終わったそうです。

塩釜港からの流れが直撃した、北浜の地域での活動のきっかけとなった酒屋さん。

店や住居部分、一階のものは何もかもだめになりました。必死で水から逃がした商品すら、盗難にあいました。残った家を直してがんばる方々には、仮設に移った方々のような支援がありません。自費で復旧を進めるので非常に厳しい歩みです。

瓦礫の撤去、ヘドロをかきだし。洗浄。壁を張りなおし、冷蔵庫を入れ替え……商品を少しずつ増やして。ようやく店らしくなり、のんびり出来るリビングが戻りました。しかし、この地区は震災前の三割程度しか住人がいないので、お客さんがとても少ない状況です。

活動をきっかけに、

”させていただく”でもなく、”してあげる”でもなく、ジュースや土産のお酒を買いによります。

あっちの居酒屋で馬鹿話をしたり、こっちの店で美味しいケーキをいただきます。

少しずつ品揃えが戻ってゆくのが嬉しくて。

”あの街”でこんなに買い物が出来るのが楽しくて。

「いらっしゃい！」の笑顔が温かくて。

経済復興支援なんて程遠い、小さな小さな普通の取引ですけど。また来たよっ！って、長い付き合いをして行こうと思います。

自分の手の平の大きさをしっかり押し量りながら、

したいこと。できること。すべきこと。

良く考えて、無理することなく少しずつ。

永くのんびり繋いでいきたい絆。

災害ボランティア活動。塩釜。多くの志。

震災をきっかけにした、それぞれに多くの出会い。

どんな活動でも、思想でも。観光に行くのもいいでしょう。

是非、次へ繋げてください。

”次はあなたがリーダーですよ”

(ボランティア 蒲地 龍一)

なんと今回は4頁目もあります。SDSC直轄ベースで最後の産声をあげた米川ベースです。始まりは4月30日でした。米川からは、新旧ベース長の大西勇史さん、千葉道生さんそして、長期に亘ってベースを支えて下さった、山内 豊さんの想いです。

大西さんはこの春、晴れて東京教区の助祭に叙せられました。山内さんはこの春からイエズス会の神学生です。次は千葉さんですか？ ぜひお祈り下さい。

よね
かわ

天国満1歳！

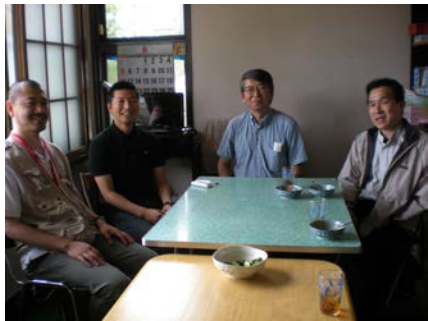
しづ
がわ

2011年4月30日。米川(南三陸)ベースは誕生した。押しも押されぬ人気ベースに成長した今からは考えにくいですが、最初のボランティアは4人だったと記憶している。そこから、半月ほど1~3人と言う日が続いた。始まりは頭を抱える日も！



左から2番目筆者！左端神山さん！米川教会初期ベースにて！

それはそれはひっそりとした誕生だったと思う。ほぼ更地と化した南三陸と歩むため、生きていくために産み落とされた、という意味からしてもあまりにも心許なくそれゆえに不確かで、か細い産声だったようにも思う。



左から成井局長！筆者！幸田司教、紙崎神父

いま振り返ってみても、あのベースは天国だと思う。あの食卓は天の宴そのものだと思う。特に夏以降の天国ぶりは目覚ましい。そして、そんな天国はこの度、1周年を迎える。天国も満1歳になるのである。

そろそろ歩きだしてしまう天国を体験しに、ぜひ一度、米川(南三陸)ベースへ。

(東京教区 大西 勇史)



米川新ベースで、イエーイ！

3・11から1年が過ぎた今、各ベースの活動は脈々と続いています。しかしながら、どのベースでもボランティアが少ないのが現状です。更に福島ではいわき、原町において支援活動が展開されていますが、放射能の問題は福島県全域に拡がり、県内在住の方々を苦しめています。さまざまな事柄が複雑に絡み合い、支援の方法も簡単ではありませんが、何時までも手を拱いて居る訳にもいきません。小さな歩みであっても確実に福島に寄り添う支援活動を続けたいと考えております。これからも皆さま方のボランティア派遣をはじめとした支援活動へのご理解とご協力を宜しくお願い致します。

現在のところ、岩手の沿岸部北から、宮古(札幌教区)大槌(長崎管区)釜石(SDSC直轄)大船渡(大阪管区)米川(SDSC直轄)石巻(SDSC直轄)いわき(さいたま教区)。そのほか原町に東京管区でもベース設営準備中です。更に仙台教区内の

被災地の方々最優先で！

去年の6月に初めて米川ベースに来た時は米川教会の司祭館がベースでした。とても小さなベースでしたが狭い食堂の中で10人くらいの夕食はアットホームで楽しかったです。昨年7月、夏休み前に現在のベース、



志津川にて千葉隊集合！オレンジビブスが筆者！

米川一区集会所に移りました。学生の長期休みに入ると沢山の人が来るようになり司祭館がベースだった時とはまた違い、生き生きとしたベースになりました。ベース運営していくにあたって大事にしている事は、ベースがある米川地域との繋がり、活動拠点である南



サボセンの稲江さんとベースを語る！

三陸町社協との繋がり、そして仙台教区サポートセンターとの繋がりです。自分が何か特別な事をできる訳ではないので、被災地の人たちが本当に何を望んでいるか最優先に置き、ボランティアの皆さんと一緒に活動に行っています。被災地の人々や漁師さんとの触れ合いは人間の本質的な温かみに触れる事ができるので、私自身にとっても日々貴重な体験をさせて貰っています。

(千葉 道生)

競争ではなく共生の価値観へ！

カリタスジャパン米川ベースのスタッフをしている山内豊です。米川ベースでは、南三陸町の瓦礫の撤去、漁業支援、仮設住宅支援などの活動を行っています。私は仮設住宅のコミュニティづくりを支援する移動カフェを主に担当しています。



米川ベースボランティアと！筆者左から2番目

被災地でボランティア活動をしていると様々な人に出会います。被災者、ボランティア、行政など様々な人です。そこで出会ったほとんどの人々に「喜びや悲しみを共有しともに生きて行こう」という願いを見ることが出来ました。私たちの世代は、時代と時代の狭間に生きています。高度経済成長期に作られた規範意識が脆くも崩れ、新しい価値観に飢えている世代でもあります。私は被災地での活動を通して新しい時代の萌芽を見ることが出来ました。競争ではなく共生の価値観です。被災地から共生の輪を広げていきたいです。

(山内 豊)

千葉道生ベース長から一言

温厚な佇まいの中でも時折見せる芯の強さが光る、米川ベースのお茶っこリーダー山内豊さん。どんな活動でも楽しんでこなし、米川の裸参りにまで参加し地元も大喜びでした！

▼小教区の支援活動も盛んになりつつありますし、そして何よりこのような現場の活動を日本中の各地から後方支援して頂いていることも本当にうれしい限りです。この出来事をおして、日本の教会が、神さまのみこころに触れ、その存在意義を再認識出来たならば...と祈らずには居られません。

(小松 史朗)

3 ページでは、石巻の現山本ベース長の想いと釜石ベースの方々の1年間に焦点を当てます。釜石の始まりは4月2日でした。

毎日の小さな働きで、希望の灯をともししていきたい

8月5日に、ベースは石巻教会のある小高い丘からふもとの3階建のビルに引っ越しました。ボランティアさんたちを受け入れつつ引っ越しをし、変わりなく活動に行ってもらい、食事を提供し、就寝してもらうために綱渡りのような毎日を過ごしました。門脇中学校でのお湯出しは3月31日に始まって以来、一日も途切れることなく、避難所の締まる10月9日の朝まで続けました。これは、ひとえに、ぞくぞくと詰めかけてくださったボランティアさんたちのお蔭です。本当にありがとうございました。

現在はようやくベースの1階の改装がほぼ終わり、ベース周辺の自宅に残って頑張ってくられた方々に、お茶飲みをしていただけるスペースになりました。仮設住宅でのお茶会「カリタスサロン」も東松島市と石巻市合わせて7か所にうかがっています。こんな毎日の小さな働きが、この被災地の人々の心に灯りを灯し、希望を増すことを願って止みません。またボランティアに来てみてくださいね！（山本 紀久代）



石巻新ベース開所式でにっこり！

かま
いし

命を与えられてボランティア！

顧みますと、大病を患って退院後2ヶ月もたたない内に未曾有の東日本大震災が発生し、私の家は床下浸水ではありましたが、避難所に避難いたしました。避難所に指定されていた地域の集会所で目を覚ますと「水がありませんどうしましょう」の問いかけに応じて近所の山から飲料水を近隣に配達したのがボランティアの始まりでした。

その後、遠野教会の信者と3名で直ちに「小さなカリタスの会」を結成し、カトリック釜石教会で近所の方々の協力を得て遠野教会で作成されたおにぎり、牛乳、豚汁などで炊き出しを3月中に3度行うことができました。引き続き無料温泉ツアーを3・4月中に7回実施し、市民の元気回復に努めました。その後、4月2日に仙台教区サポートセンターの釜石ベースを司教様に設置していただき、瓦礫撤去、写真洗浄、心のケア、仮設訪問、物資の供給など本格的なボランティア活動をスタッフ、ボランティアが一丸となって皆楽しく、祈りながら、感謝の日々をカリタスの精神で実施したことが思い出されます。（小野寺 哲）



震災直後、釜石聖堂前まで流されてきた瓦礫

この一年！

余りにも濃い一年でした……。未だに頭の中は整理がつかない状態で、さらに目一杯に詰まった心の中身をどうやって振り返れば良いのか、その方法を私は知りません。

あの当時は誰しもがそうであったように、私も心の準備などする余裕は全くありませんでした。むしろ何も考えず、只々必要に

迫られ、何かに追われるようにして始まったのが釜石ベースキャンプであったように思い出しています。

私の活動は、どちらかというと全国から集った善意（多くのボランティアさんたちや支援品など）と被災地とをつなげる役割の方が大きかったのですが、その活動を通して沢山の出会いがあり、沢山のつながりができました。本当に大切な宝です。

この宝物をそっと心にしまっておくのではなく、むしろ多くの方々に差し出し、必要な場があればさらに深め、つなげていきたいと願っています。

震災を機に全く新しい世界が始まった被災地の教会では、今日も子どもたちが賑やかに遊んでいます。そんな教会の姿に喜びと慰めを実感する今日この頃です。（釜石ベースキャンプ 伊瀬聖子）



現在の釜石ベーススタッフ 筆者左から2番目

東日本大震災から1年～心のケアに携わり～

釜石にて「心のケア」に携わり1年という月日が経ちました。何より、内面を分かち合う輪の中に迎えてくださった釜石の皆さま、ベースの皆さまに感謝しています。

大震災とその被害は、釜石の街の方々の生活を根底から変えてしまうほどのものでした。『こんなはずじゃなかった』と何人の方から聞いたことか……。望んでいた現実と違う……等の内面の痛みは大きな傷となって街の方々に刻まれているようです。この叫び・この痛み・この不合理の基でも生きる力を失わずに、この被災地で生きるためには、いかにどの力が必要なのかと痛感します。しかし、この被災地に住む方々から、この現実でも人として生きる力が如何なるモノであるかきっと私たちに教えてくれる日が来るであろうと信じたいと思います。（宇根 節）



ふいりあで被災者に耳を傾ける筆者 左

この一年を振り返って



釜石教会頭上拡がる夜空。筆者撮影！

「暗闇にいるから光が見える」。震災前に耳にしたこの言葉は、ある末期ガン患者の方が残した言葉でした。災害によってズタズタにされた地域で暮らす人々は、今まさに暗闇の中で苦しんでいる。その言葉に耳を傾けながら感じたのは、人々の心の中で、震災という悲劇が

引き金となって、本来隠してきた闇が明るみに出た、という事ではないかと感じております。信じていた隣人を助けたつもりが、逆に裏切られ、無視される驚き。混乱した生々しい現実を目の当たりにした人々が、弱り切った心でどの様にして受け止めるのか、テレビなどの報道では全く語られないつらい現実がある。しかし、その現実を目の当たりにしたとき、ふと自分の周りを振り返り、決して他人事ではないことに気がつく。ありのままの現実だけに留まるのではなく、救いの光を求め、苦しみを乗り越えようとしている私たちと共に、復活したキリストがそこにいて下さるから、きっと大丈夫。そう信じています。（舟山 亨）

この頁では、塩釜ベースのブラザー深川に。そして、石巻から、これまでの3ベース長が想いを綴ります。石巻ベースは3月27日から始まりしました。始めは佐久間 力君、次は越智 教実君、そして現在の Sr. 山本（援助会）と続きます。ちなみに佐久間君はこの春から札幌教区の神学生になりました。越智君は大阪の老人福祉施設で働きながら資格を取る勉強中です。どうぞお祈り下さい。

塩釜でのボランティア！

私が塩釜に入ったのが確か5月5日だったと記憶している。

仙台を通過し塩釜に入っても震災の影響をあまり見ることはできなかった。途中の多賀城市では国道45号線沿いにガレキが少々散乱している光景は見る事ができたのだが、注意をして見ない限りあまり被災したという印象はなかった。

5月5日に入って仕事をし始めたが何をどうするのかあまり分かっていなかった。教会の信者の三島さんの後に入り、その仕事の継続をした。3月11日の1週間後に教会を開放してボランティアの仕事を始められたと伺っている。

自分が教会に入った時はすでにボランティアの基礎が出来上がっていたのでそれほど迷うことなく仕事は開始できた。三島さんも毎日夜のミーティングに参加していただいたので仕事は始められた。その後仙台サポートセンターからボランティアの経験のある蒲池さんを紹介された。1週間後は塩釜のスタッフとして受け入れ、大いにリーダーシップを発揮していただき、塩釜が順調に回轉したのも彼のおかげだと大いに感謝している。

塩釜に入り周囲の環境を観察し、訪問してみると被災のすごさに改めて驚かされ、何かをしなければいけないと痛切に感じさせられた。塩釜では海の近くでは2mほど浸水し、家屋は破壊されあるいは半壊の被災にあった方々がかなりおられた。

仙台サポートセンターで言われたことは、塩釜に特化して働いてほしいこと、ボランティアはいずれ引き揚げたとき信者さんがそれを引き継いで仕事ができるようにと言われ、スタートした。

5月、6月、7月頃までは家屋の洗浄、瓦礫出し、家財道具の移動や運搬、そして小さな工場のお手伝い等。7月、8月頃から松島の4島のお手伝い、浸水侵入の防止、がれきの撤去、家財道具の移動等、そして水産業のお手伝い（カキ棚作り、カキの養殖のお手伝い、土嚢づくり）。9月10月になると震災の仕事が少なくなり塩釜の社協もボランティアから撤退、しかし社協に入る市民からの要望は、カリタスジャパンに頼まれた。ボランティアの数に対して仕事が減り始め、仕事を見つけるのが苦しくなる。そのころから塩釜の土木課の許可を得て公園や道路の草取り等のお手伝いも始める。

8月にはパレスティナの若者が参加したプロジェクトも実施。その時は40人ほどの参加で蒲池さんにご奮闘頂き終了できた。仙台のカリタスジャパンには物心共にご援助いただき大いに感謝している。いろいろご迷惑もおかけして済まなかったと感じている。

次のステップを考え仙台の信者さんを巻き込んだボランティアがスタートし、その後台風で塩釜に洪水が来たときまた、仙台にお願いしお手伝いを頂き感謝している。もう少しこのボランティアが継続できたら、その後のボランティアがうまくいったのでは？と感じている。

塩釜にご参加くださった沢山のボランティアの方々、本当にありがとうございました。同時に塩釜教会を貸してくださった信者の方々、信徒会長さん、食事の差し入れをたくさんしていただいた佐山先生他多くの信者さん方に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。神様のご加護がありますようにお祈りいたしております。
(ブラザー深川)



パレスティナの若者と塩釜ベース！

いしの
まき

～震災から1年が経って～



門中のお湯だしチーム！

昨年3月23日、石巻市の調査として初めて現地入りした時の事を鮮明に覚えています。無力感・絶望感を感じながらも、まずは出来る事をと石巻教会での活動を開始しました。現地の方の協力を得て

学校での給湯ボランティアや、支援

物資の提供、そして清掃活動が始まりました。私自身は現地を廻る事が主でしたが、皆さんに助けられながら、また不思議な導きを感じながら過ごした1ヶ月でした。今でも時折あの光景を夢に見ます。しかし、多くのボランティアや現地の人たちと交わり助けられ、絆や愛という人と人との関係性を感じながらこれほどの濃密な時間を過ごした事は、私にとって大きな恵みとなりました。

石巻ベースも新しく開所され、新しい活動も広がっていると聞きます。今では被災地の生活も新しい段階に入り、復興までの遠い道のりをさらに一步一步進んでいくことでしょう。その中でカリタスジャパンの支援が多くの実を結ぶ事を祈り、また期待しています。
(佐久間 力)

石巻での活動を振り返って！

僕が参加したのは4月19日～5月11日、5月18日～6月6日、6月30日～9月11日までの合計4ヶ月程でした。

ベースの主な活動も時期によって色々でしたが、民家・工場などの建物の中に入った泥の撤去作業、避難所内部でのお湯や飲み物の提供、仮設住宅での移動カフェなど様々な活動を行いました。

泥の撤去作業では、社会福祉協議会(以後社協)に行き作業を行う他に、教会の信者さんからの依頼などの作業を行いました。山形醤油店、本田水産など大きな工場での作業も行い、泥を出すだけでなく、その後の商品提供の支援をしてくれたボランティアの方もいました。

避難所内部では自分でお湯を沸かす事が出来なかったのも、僕達でお湯を沸かしてそれを配るサービスを行っていました。4月頃からお湯だけでなく、コーヒー、紅茶などの飲み物も一緒に提供する様になり、テーブルとイスをセットして避難所内部の交流の場所となりました。夏には七夕のイベントなども行いました。

仮設での活動は東松島での移動カフェを主に行い、避難所内部と同じように人々の交流の場所のきっかけになれるようにイベントなども行いました。

僕は主に避難所内部での活動を担当していたので1年を振り返るとやはり避難所での出来事を思い浮かべます。泥の撤去作業の様な目に見えて実感できる活動ではなかったのですが、日にちを重ねるごとに話しかけてくれる人たちが増え、絆が生まれたと思います。ボランティアを行っている時にも感じていた事です、この震災で失ったものはとても多く、大きな傷が残ったと思います。しかし、そこで出会った人と人との絆が多く生まれたのではないかと感じました。これからはその生まれた絆を絶やす事なく大事にしつつ自分の出来る限りの支援を行っていき、被災した方々と少しでも関わっていけるように努力をしていきたいと思えます。
(石巻ベース 2代目ベース長 越知 教実)